

天理図書館蔵
正平七年写本

『最勝王經音義』の性格

——類聚名義抄諸本との比較を中心に——

佐々木 勇

目次

- 一、はじめに
- 二、書誌の概要
- 三、各部の漢字の配列順
- 四、「類聚名義抄」諸本との注文の比較
 - (1)和訓
 - (2)音注
 - (3)義注
 - (4)字体注
- 五、和訓のアクセントについて
- 六、むすび

一、はじめに

「金光明最勝王經」の音義としては、大東急記念文庫蔵の承暦三年抄本が、今日広く知られている。本稿で取り上げる天理図書館現蔵の正平七年写『最勝王經音義』は、承暦三年抄本以外の「金光明最勝王經音義」の現存本としては、唯一のものである。

この書を、初めに学会に紹介したのは、川瀬一馬博士であり、近年、西崎亨氏による論考が発表されている。⁽²⁾川瀬博士は、本音義が、「類聚名義抄觀智院本系統の本を参照してゐる」ことを指摘され、「音訓を類聚名義抄にもとめてゐる爲、南北朝頃に於ける國語資料としては特に有益な資料といふ事は出来ない」とされた。⁽³⁾これに對して、西崎氏は、「觀智院本類聚名義抄」との差異に注目され、和訓のアクセントは、「觀智院本類聚名義抄」と少なからぬ相違が見られることを述べている。

しかし、本書の基本的な性格については、未だ正確な報告が、見られない為、本稿を草した次第である。

二、書誌の概要

書誌的な事柄については、既に川瀬博士の記述が有り、⁽⁵⁾西崎氏の一部影印を交えた紹介も存する為、ここでは繰り返さない。ただ、奥書のみを重ねて記すならば、左記の如くである。

正平七年^{壬辰}朱明之天披類『聚名義之書籍注取勝王經』之音訓願以此小善速成彼『大果而已』

仲甚

川瀬博士は、この天理図書館蔵本を、仲甚手写の原本として認められた。筆者も、過日、原本を見る機会を得、正平七年の書写であろうと判断した。

尚、本音義中には、各部分ごとに整理して書写した後に、各部の終わりに、後に増補したと認められる部分が存する。やや墨色が濃く、大ぶりの字であるが、同じく仲甚の手になるものと思われる。また、各部の始めには、朱で、「一」「二」「三」……と通し番号が付され、音注の大部分にも、朱の合点が見られる。増補の部分にも朱の合点は施されている為、朱点は本文増補の後に加えられたものと見られる。

三、各部の漢字の配列順

本音義は、その部立が、「人部」で始まり、「雜部」で終わっており、「類聚名義抄」に近いものであるが、部首の順序は、必ずしも「類聚名義抄」に従っていない。このことは、川瀬博士・西崎氏の指摘の通りである。

ここでは、各部首内の漢字の配列順について見る。川瀬博士は、前引書中で、「各部の漢字の配列順も亦名義抄に據つてゐる。勿論所収字数は遙かに少量であるから、名義抄の中から最勝王經所用の漢字を拾ひ出したといふ關係になつてゐると言つてよい。」と記述されておられる。

ところが、今、本音義の「人部」の掲出字に、改編本類聚名義抄諸本⁽⁷⁾での所在を対応させると、表Iの如くであり、いずれの本とも、少なからぬ相違が見られる。

本音義は、仲甚の依つた「類聚名義抄」の掲出順に従つてゐるとも考えられようが、現存の改編本諸本の掲出順序を見るに、本音義の掲出順に漢字が配列されたような改編本の一本が存在した可能性は、極めて低いと言わざるを得ない。

「類聚名義抄」の掲出順ではないとすると、何に依つてゐるのが問題となる。ここで、本音義が「最勝王經音義」であることから、最勝王經本文との關係が予想される。この点を確かめる為に、本音義の第一の部首「人部」と、第二の部首「言部」内の掲出字と、それらの漢字の「金光明最勝王經」内の所在⁽⁸⁾とを示したものが、表IIである。

表IIに見られる通り、初めに、最勝王經中の所在に關係なく、部首となる「人」「言」が掲げられ、⁽⁹⁾以下、ほぼ、經本文中の初出例の出現順に並んでゐる。⁽¹⁰⁾人部の終わりの二字、「估」と「備」とは、やや墨色が濃く、大ぶりの字であり、後の増補と見られる。言部の終わりの三字、「讒」「訶」「警」の内、最後の「警」は、後の増補と見られるが、「讒」「訶」の二字は、その様には見られない。或いは、一段階前での増補と考えられようか。また、言部の「5 誹」の掲出順序は、「金光明最勝王經」中の初出例の所在と対応しない。これについては、最勝王經中に「誹謗」の語が、屢見られる為、

「6 謗」の直前に「誹」を配した、とも考えられようかと思う。

右の如く、疑問の例は存するが、本音義の掲出字は、「金光明最勝王經」に於ける出現順に並べられた可能性が高い。また、本音義の掲出字の中には、類聚名義抄に見られない字が存する。その掲出字と注文は、次の如くである。

喇 ^(4ウ) (5ウ) 惹 ^(4ウ) (10オ) 婁 ^(4ウ) サイ (14ウ)

これらの漢字は、「金光明最勝王經」の中には、見出すことができ、本音義での掲出順位も、最勝王經での、当該字の初出例の所在と対応する。従って、やはり「名義抄の中から最勝王經所用の漢字を拾ひ出した」とは言えないことが、確かとなる。最勝王經の漢字を拾ひ出し、名義抄を以って、注したと見られるのである。

四、「類聚名義抄」諸本との注目の比較

本音義の掲出字に対する注文は、一見して、改編本の『類聚名義抄』に依っていることが、明らかである。前節で見られた、『類聚名義抄』に掲載されていない三字には、「婁」字に、「エサイ」と見られるのみであり、『類聚名義抄』に見られる注以外は、書き込まないという基本姿勢が伺える(「エ片仮名」の型の音注については、後述)。

以下、本音義の編者仲甚が依った『類聚名義抄』は、改編本の内に、どの様な位置を占めるものであったのかを、現存改編本諸本との比較を通して考えたい。

比較は、(1)和訓、(2)音注、(3)義注、(4)字体注の順で行なうこととする。

(1)和訓

現存改編本諸本の残存状況より、比較は、人部・イ部・ミ部・ニ部・身部・耳部・女部に属する本音義掲出字の総てを対象として、行なうこととする(以下同じ)。

本音義の第一掲出字「人」と、第二掲出字「佛」について、名義抄改編本諸本の注目を記せば、次の通りである。(声

表 I

17 倫	16 佻	15 偽	14 伎	13 倦	12 傷	11 儀	10 値	9 倒	8 促	7 侵	6 仙	5 健	4 休	3 伽	2 佛	1 人	
〃 15	〃 16	〃 20	〃 14	〃 30	〃 24	〃 33	〃 25	〃 23	〃 29	〃 29	〃 7	〃 25	〃 7	〃 7	〃 1	佛上 1	観智院本
9 才	9 ウ	11 ウ	8 才	17 ウ	13 ウ	19 ウ	14 ウ	18 才	16 ウ	16 ウ	5 才	14 ウ	5 ウ	17 才	3 才	3 才	高山寺本
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	一 2ウ	/	一 3才	/	一 1才	一 1才	蓮成院本
/	6 ウ	8 ウ	5 才	14 ウ	11 才	16 才	11 ウ	10 ウ	14 才	14 才	/	11 ウ	1 ウ	1 才	/	/	西念寺本

天理図書館蔵『最勝王經音義』の性格
正平七年写本

部人 表 II

16 佻	15 偽	14 伎	13 倦	12 傷	11 儀	10 値	9 倒	8 促	7 侵	6 仙	5 健	4 休	3 伽	2 佛	1 人		
四 7 — 29	三 2 — 8	二 14 — 2	二 11 — 6	二 9 — 1	二 8 — 8	二 8 — 5	一 12 — 19	一 5 — 25	一 4 — 7	一 3 — 21	一 3 — 20	一 2 — 2	一 1 — 11	一 1 — 3	一 1 — 4	卷紙 行	最勝王經 中の所在

部言

17 謎	16 謨	15 詰	14 誤	13 誑	12 誦	11 諦	10 誘	9 誼	8 論	7 詣	6 謗	5 誹	4 證	3 調	2 譯	1 言	
四 11 — 13	四 9 — 13	四 5 — 7	四 6 — 23	二 11 — 2	二 8 — 27	二 1 — 6	一 13 — 14	一 13 — 11	一 11 — 15	一 7 — 7	一 6 — 27	三 1 — 6	一 1 — 8	一 1 — 4	一 1 — 1	一 5 — 18	最勝王經 中の所在

35備	34估	33僧	32回	31俳	30優	29保	28倭	27佞	26像	25佗	24仗	23伐	22傍	21價	20僕	19僮	18停
〃 35	〃 27	〃 2	〃 23	〃 23	〃 32	〃 33	〃 3	〃 17	〃 15	〃 22	〃 14	〃 13	〃 3	〃 20	〃 4	〃 3	〃 3
21才	15ウ	3才	13ウ	13ウ	19才	21ウ	4才	10才	9ウ	12ウ	7ウ	7ウ	4才	12才	11才	4才	4才
/	/	一 1才	/	/	/	/	一 1ウ	/	/	/	/	/	一 1ウ	/	/	一 1ウ	一 1ウ
17才	12ウ	/	18才	18才	15ウ	16才	/	7才	5ウ	9ウ	5ウ	4ウ	/	8ウ	/	/	/

35備	34估	33僧	32回	31俳	30優	29保	28倭	27佞	26像	25佗	24仗	23伐	22傍	21價	20僕	19僮	18停	17倫
レ 一 13 1	レ 三 12 9	十 9 24	十 3 13	十 3 13	九 7 13	八 12 11	八 13 27	八 9 18	七 11 8	七 8 23	七 2 11	七 2 4	六 4 27	六 3 24	五 7 19	五 7 19	五 6 11	五 2 4

34警	33詞	32讒	31謔	30諾	29詐	28獲	27議	26謬	25訖	24訟	23壞	22謙	21諍	20討	19託	18誕
一 2 19	一 1 10	六 8 7	九 8 27	九 6 11	八 13 11	七 13 1	七 11 8	七 11 2	六 12 20	六 9 2	六 2 24	六 2 23	六 2 17	六 2 7	五 6 10	五 1 21

点は、印刷の都合上、省略した。）

<p>人^{音仁} マヒト^マ ヲレ^レ サネ^ネ マホル^マ ユク^ク (本音義 2オ)</p>	<p>人^{音仁} ヒト^{ヒト} マホル^マ ユク^ク サネ^ネ</p> <p>人^{音仁} ヒト^{ヒト} ヲレ^レ サネ^ネ マホル^マ ユク^ク 一人^{ヒト} (以下略)</p> <p>(西念寺本は掲出字相当部分欠。)</p> <p>(蓮成院本 一1オ)</p>
<p>佛^{符弗反} ホトケ^ケ ホノカナリ^カ タスク^ク タチマチ^チ オホキナリ^キ (本音義 2オ)</p>	<p>佛^{音費} ホノカナリ^カ 又符弗反^フ ホトケ^ケ ヲホキニス^ス タチマチ^チ 又音弼^フ タスク^ク 和音部ツ</p> <p>佛^{符弗反} 音費^フ ホノカナリ^カ 又佛^フ 俗^{フツ} 和云^{ホトケ} 又別^フ ヲホキニス^ス 又音弼^フ タスク^ク 又佛^フ 俗^{フツ} 佛字^{フツ} 又別^フ</p> <p>佛^{音費} ホノカナリ^カ 又音弼^フ タスク^ク 又符弗反^フ ホトケ^ケ 禾一復ツ^フ オホキニス^ス</p> <p>(西念寺本は掲出字相当部分欠。)</p> <p>(観智院本 佛上1)</p> <p>(高山寺本 3オ)</p> <p>(蓮成院本 一1オ)</p>

和訓について比較すると、「人」は、観智院本以下三本共に、同一の訓を注しているが、高山寺本のみ、それらの和訓の掲出順序に相違が見られる。次の表IIIでは、「人」字に対する、観智院本・蓮成院本の注文の如く、掲出順序を含め、全く本音義と一致する場合には、○印を、高山寺本の注文の如く、掲出順序は異なるが、本音義と同一の和訓が載せられている場合は、△印を記入した。

37 徳	○			△		
36 彳	○			○		⊖ (スクナシ)
35 備		⊖ (ツカル・ラロカニ)		△	△	△
34 估	⊕ (アキナフ)	⊕ (アキナフ)		⊕ (アキナフ)	⊕ (アキナフ)	⊕ (アキナフ)
33 僧	○		○	○		
32 備	⊕ (タハフル・メクリ)	⊕ (タハフル)		⊕ (タハフル)	△	△
31 俳	⊕ (タハフル・メクリ)	⊕ (タハフル)		⊕ (タハフル)	△	△
30 優	⊕ (メクシ・ユタカニ・タハフレ・ウレフ)	⊕ (メクシ・タハフレ・ウレフ)		⊕ (メクシ・タハフレ・ウレフ)	△	⊕ (メクシ・タハフレ・ウレフ)
29 保	△			△		△
28 倭	⊕ (カタム)	⊕ (カタム・アサマク)		⊕ (カタム・アサマク)	△	
27 法	○			○		○
26 像	⊕ (カタハサム)	△		△		△
25 侘		⊖ (クルシ)		⊖ (ワフ・ホロフ・クルシ)		⊖ (クルシ)
24 仗	○			△		○

51 逾	○	△	○ (スキタリ)	⊕ (ズミ)
50 速	⊕ (コホス)	△ 同上↓		⊕ (コホス) ○ (オヨフ・コホル)
49 足	△ 和訓なし	△ 和訓なし		△ 和訓なし
48 御	○ (キル)	○ (リ)		○ (キル)
47 微	⊕ (ハキ・ヤフル・スコシキ・ミソカニ)	⊕ (ハキ・ヤフル・スコシキ)		⊕ (ハキ・ヤフル・スコシキ・クトシ)
46 循	⊕ (ツキ)	△ 同上↓		△ 同上↓
45 衛	⊕ (カクム)	△ 同上↓		⊕ (カクム) ○ (メクル)
44 術	○	○		○
43 履	○	○		○
42 徴	⊕ (ナル)	△ 同上↓		△
41 脩	○	○		○
40 修	△	△		△
39 徹	△	△		△
38 衛	○	○		○

65 遭	64 選 (キス)	63 邁 ⊖ (カヘル)	62 邀 △	61 途 ○	60 遵 △	59 迦 ○	58 逐 ○	57 適 (ハシメ・マサシ・サキニ・ヤル)	56 逢 ○	55 運 △	54 追 (ヤラフ)	53 迫 (ヲヒヤカス)	52 逼 ○
○	△	△	△	○	△	○	○	⊕ (ハシメ・マサシ・サキニ・ヤル)	○	△	△	⊕ (ヤカス)	△
○	△	△	△	○	△	○	○	⊕ (ハシメ・マサシ・サキニ・ヤル)	○	△	○	△	△
○	⊕ (キス)	△	△	○	△	○	○	⊖ (アフ)	○	○	○	⊕ (オヒヤカス)	△
		△	△	○	△	○	○	⊕ (マサシ・サキニ・ヤル)	○	○	⊕ (ヤラフ)	⊕ (オヒヤカス)	△
		△	△	○	△	○	○	⊕ (マサシ・サキニ・ヤル)	○	○	⊕ (ヤラフ)	⊕ (オヒヤカス)	△
		△	△	○	△	○	○	⊕ (マサシ・サキニ・ヤル)	○	○	⊕ (ヤラフ)	⊕ (オヒヤカス)	△
		△	△	○	△	○	○	⊕ (マサシ・サキニ・ヤル)	○	○	⊕ (ヤラフ)	⊕ (オヒヤカス)	△
		△	△	○	△	○	○	⊕ (マサシ・サキニ・ヤル)	○	○	⊕ (ヤラフ)	⊕ (オヒヤカス)	△
		△	△	○	△	○	○	⊕ (マサシ・サキニ・ヤル)	○	○	⊕ (ヤラフ)	⊕ (オヒヤカス)	△
		△	△	○	△	○	○	⊕ (マサシ・サキニ・ヤル)	○	○	⊕ (ヤラフ)	⊕ (オヒヤカス)	△

79 聡	78 聴	77 耳	76 眈	75 驅	74 射	73 身	72 置	71 叵	70 匹	69 區	68 𠂔	67 遂	66 遺
○	○	○	○	○	⊕ (トホシ) ⊖ (トホル)	○	△	○	○	△	△	⊕ (ハタル・ヤシナフ・シタカフ)	⊕ (クハフ・ハナル・シナフ・ ウツス・モシ・アマル)
△	○	○	○ ⊖ (オホッル)	○	⊕ (トホシ)	○	⊕ (ツクル)	○	○	△	△	⊕ (ヤシナフ・シタカフ)	△ 同上
△	○	△	△	○	△ 同上	○	△ 同上	○	○	△	△	△ 同上	△ 同上
○	○	○	○	○	△ 同上	○	△	○	○	○	△	⊕ (ヤシナフ・シタカフ) ⊖ (ユク)	△ 同上

93 妹	92 姉	91 妖	90 娯 (タノシヒ)	89 婢	88 奴	87 姪	86 妬	85 嫉	84 妹	83 嬾	82 女	81 聲	80 聲
○	○	○	⊕	○	○	○		△	○	△	○		○
			(タノシヒ)				⊖ (ネタミ)					⊖ (ナル)	
○	○	○	↑ 同上 ↓	○	△	○	△	△		△	○	○	○
									⊖ (アケ)				
⊕ (ホキオトイモウト)	○		(虫損のため不明)	○	△	○	△			△	○	○	○
		○	⊖ (カミナキ・ウツタマ)					⊖ (ウラヤム・ソネム)	⊖ (アケ)				
							○			△	○	○	○

(○)内は各本中でのパーセンテージ

△	○	
15 (15.0%)	43 (43.0%)	観智院本
29 (29.0%)	31 (31.0%)	高山寺本
16 (27.1%)	22 (37.3%)	蓮成院本
15 (19.2%)	32 (41.0%)	西念寺本

表IV

表IIIを、数量的に処理したものが、表IVである。

100 婆	99 婆	98 妄	97 奸	96 娜	95 妃	94 媼
△ 〈和訓なし〉	○	△	⊕ (カクム)	○	○	⊖ (ナラフ・ハカラフ・ヒ)
△ 〈和訓なし〉	○	△	△	○	○	△ 〈同上〉
△ 〈和訓なし〉	○	△	△	○	○	⊖ (ヒタク・ヒ・ナラフ・ヒク・ヒタク・ハカラフ)
			⊕ (カクム)		○	⊖ (ナラフ・ハカラフ・ヒ)

⊖	⊕
13字 (20語)	31字 (56語)
12字 (18語)	26字 (43語)
9字 (17語)	12字 (27語)
11字 (18語)	22字 (38語)

()内は和訓の語数

表IIIを、数量的に処理したものが、表IVである。

表IVに於いて、全体の中での、○印の割合を見ると、観智院本が、43.0パーセントと最も高く、次いで、西念寺本の、41.0パーセント、蓮成院本の、37.3パーセント、高山寺本の、31.0パーセントの順となっている。また、△印の割合は、逆に、高山寺本が、29.0パーセントで最も高く、次いで、蓮成院本・西念寺本・観智院本の順である。○印と△印との割合は、改編本諸本ごとに異なるが、観智院本と西念寺本とが、ほぼ同じ割合を示し、高山寺本と蓮成院本とが、またほぼ同じ割合を示している。観智院本・西念寺本が、○印(掲出順序を含め、全く一致する場合)の割合が高いことより、和訓の掲出順序については、本音義は、観智院本・西念寺本に近いと言えよう。⁽¹³⁾

一方、⊕と⊖の数をみると、改編本諸本いずれも⊕の方が多く、全体として、本音義よりも現存改編本諸本には、和訓が多いことに気づかれる。

その理由として、先ず、本音義の編者仲甚の依った類聚名義抄には、現存の改編本類聚名義抄に見られる訓の一部が、存しなかったと考えることができる。⁽¹⁴⁾ もう一つの可能性として、類聚名義抄に存した和訓を、仲甚が、削除したと考えることもできよう。現段階では、どちらとも決めかねるが、他の改編本の状況と、後に述べる音注・義注・字体注については、類聚名義抄の注を削除したと考えられる点から、仲甚の依った類聚名義抄には、現存改編本と同様の和訓が存在しており、その一部分を、仲甚が削除したという可能性の方が、高いように思われる。

また、⊖の訓(本音義に存しながら、類聚名義抄に見られない和訓)も存するのであり、「伽」に対する「ワレ」の訓、「倦」の「イタム」、「停」の「ナクメテ」の訓等が、何故、本音義に見られながら、現存の改編本類聚名義抄諸本には見られないのか、が問題となるが、現在は、この点について十分な考察ができていない。後考にまちなたい。⁽¹⁵⁾

(2)音注

音注について、(1)和訓と同様の表を作製すれば、表Vの如くなる(紙幅の関係上、諸本間で相違の見られるものに限った)。

表V

	観智院本	高山寺本	蓮成院本	西念寺本
2佛	⊕ (費・又音弼・和音部ツ)	⊕ (音費・又音弼)	⊕ (音費・又音弼・禾上復ツ)	
3伽	○	⊖ (禾カ)		○
4休	⊕ (禾ク)	⊕ (又音ク)	⊕ (禾ク)	⊕ 同上
5健	⊕ (禾見又去コン)	⊕ (又音見コン)		⊕ (禾見又去コン)
7侵	⊕ (禾シム)	○		⊕ (禾シム)
9倒	⊕ (上島・禾耳) ⊖ (上嶋)	⊕ (音島) ⊖ (上嶋)		⊕ (上島・禾平) ⊖ (上嶋)
11儀	⊕ (禾) (_{イヤ})	○		○
13卷	⊕ (禾券)	○		○

58 逐	50 逮	45 衛	43 禮	39 徹	33 僧	32 回	31 排	29 保	27 佞	25 佻	20 僕	17 倫	15 偽
⊕ (禾同) ⊖ (禾チク)	⊕ (上代) 又弟	⊕ (禾エ)	⊕ (句) 衢二上	○	⊕ (和音ソウ)	⊕ (上回) ⊖ (上火イ)	⊕ (上排) ⊖ (上ハイ又上ヒ)	⊕ (禾ホ) ホウ)	○	⊕ (部稼勅) 家二反)	⊕ (禾ホク)	⊕ (禾リン)	⊕ (禾クキ) 又濁)
⊖ (禾チク)	同上	⊕ (音エ)	⊕ (句) 衢二音)	⊖ (禾テチ)	○	⊕ (音回) ⊖ (上火イ)	⊕ (音排) ⊖ (上イ又上ヒ)	同上	○	同上	⊕ (又音ホク)	⊕ (下リン)	⊕ (危賜反) ⊖ (危贖反)
⊕ (禾同) ⊖ (禾チク)					⊕ (禾上ソウ)								
同上	⊕ (上代) 又上弟	⊕ (禾上)	⊕ (句) 衢二上)	○		⊕ (上回) ⊖ (上火イ)	⊕ (上排) ⊖ (上ハイ又上ヒ)	○		⊕ (部稼勅) 家二反) 粉)			⊕ (禾クキ) 又濁)
									⊖ (禾カ)	⊖ (上タク)			

82 女	80 聲	78 聴	77 耳	76 耽	74 射	73 身	72 匱	67 遂	64 選	63 邁	62 邀	61 途	60 遵
⊕ (又去)	○	○	○	○	⊕ (又食亦)	○	⊖ (禾クキ)	○	⊕ (相率反)	○	⊖ (ケウ六)	⊕ (上塗)	⊕ (俊之平) ⊖ (六俊六) (上ソシ順)
⊕ (又去) ⊖ (禾ニヨ)	○	⊖ (禾チャウ)	⊖ (禾ニ)	⊖ (禾タン)	⊕ (又食亦反)	⊖ (禾シン)	△同上▽	⊖ (禾去又平)	△同上▽	⊖ (禾マイ)	⊕ (音鼻吳音交) ⊖ (ケウ六)	△同上▽	△同上▽
⊕ (又去)	⊕ (力東反)	○	○	○	△同上▽	○	△同上▽	○	△同上▽	⊖ (禾マイ)	⊕ (上鼻吳上交) ⊖ (ケウ六)	△同上▽	△同上▽
△同上▽	○	○	○	○	⊕ (又食亦)	○	△同上▽	○	△同上▽	○	△同上▽	△同上▽	△同上▽

100 姿	○		⊖ (禾シヤ)	○	
99 婆	○		⊖ (禾ハ)	○	
97 紆		⊖ (エカン)	〈同上〉	〈同上〉	〈同上〉
95 妃	○		⊖ (禾ヒ)	⊕ (方菲反)	○
94 媿	⊕ (四語反・又四義反)	⊖ (エハコヒ)	〈同上〉	〈同上〉	〈同上〉
91 妖		⊖ (エエウ)	〈同上〉	〈同上〉	〈同上〉
90 媿	○		⊖ (禾クコ)	〈虫損のため不明〉	
89 婢	○		⊖ (禾ヒ)	○	
88 奴	⊕ (禾ヌ)	⊕ (又音ヌ)	⊕ (禾ヌ)		
85 媿	⊕ (又エ自)	⊕ (又音自)	⊕ (又エ自)		

表Vを見ると、高山寺本を除き、⊕が多く、⊖が少ないことが知られる。即ち、和訓の場合と同様、改編本類聚名義抄と比較し、本音義には音注が少ないことになる。高山寺本に⊖が多いのは、本音義（また、他の改編本類聚名義抄）に存しながら、高山寺本には存しない和音注が多い故である。本音義は、観智院本・蓮成院本・西念寺本と較べ、和音注も少ないのであるが、同じく他の名義抄と較べ和音注が少ないことが指摘されている高山寺本の様子とは、異なるのである。この点から、本音義の音注は、高山寺本系統のものではないことが知られる。

高山寺本以外の三本の中で、どの本に近いかは、比較可能な例が少ない為、決定しかねる。しかし、西念寺本は、「11儀」「13巻」「29保」で、観智院本よりも、本音義に近い様相を呈し、蓮成院本は、「63遣」「80響」「95妃」に於いて、他本には見られない本音義との相違点を見せる。この事から、敢えて言えば、本音義の音注は、西念寺本・観智院本に近いということになる。これは、(1)和訓の分析から得られた結果とも一致する。

先に記した如く、本音義は、全体的には、名義抄に較べ、音注が少ないのであるが、その中に有って、本音義の方に音注が多いもの(表Vで○と記されるもの)の、一々について、次に見ることとする。

観智院本の「9倒」の「上嶋」は、観智院本では、「上島」となっている為、表中、○で表われるものである。「58逐」の「禾チク」は、本音義では、「禾同」の「同」字を墨抹して、左傍に「チク」と書かれている為、○となるものである。左傍の「チク」は、編者の見た名義抄には存しなかつた可能性が、高いであろう。「25佻」の「エタク」、「31俳」の「上ハイ又上ヒ」、「32個」の「上火イ」、「60遵」の「エソン」、「91妖」の「エウ」、「94媿」の「上ハイ又上コン」、「97奸」の「上カン」は、いずれも、「上片仮名」の型であり(ただし、類音字「火」が一例存す)、名義抄には、これに対応する音注が見られない。この型の音注は、注文の端に書き込まれるものが大部分であること、三で掲げた、「姦」の例の如くに、名義抄に見られない字に対しても、加えられていることから、名義抄によって注した後に、新たに加えられた音注と考えられる。また、「佻」の「エタク」、「俳」の「上ヒ」、「遵」の「エソン」は、所謂百姓説であり、何か依り所があったものなのかも知れない¹⁶と疑われてくる。

「60遵」に対する「順六俊六」、「62邀」の「ケウ六」も、同様に後の音注と考えられる。

これらの○の音注とは違って、「72匱」に対する「禾クキ」は、注文の半ばに書かれており、書写の後に書き加えられたとは考えられない。仲甚の見た類聚名義抄には、かく有つたと考えなければならぬ。現存の改編本は、その音注を留めていないと考えるのである。¹⁷

以上、本音義に多い音注は、名義抄によって注した後の、増補と見られるものが大部分である。

次に、本音義には見られない音注（表Vで⊕と記されるもの）について、見る。

先ず、和音注について見たい。

観智院本に代表される改編本諸本は、原撰本の和音をそのまま引き継いだものと、改変して引き継いだものとの外に、改編本に於いて、増補されたものが、相当数存することが指摘されている。⁽¹⁸⁾今問題とする⊕の和音は、改編本に於いて増補されたものであり、本音義の基となった類聚名義抄には、未だそれらの和音が増補されていなかった、と考えることも可能であろうが、この点について、表Vからは、何とも言えない。そこで、原撰本の一本と認められる図書寮本と比較可能な、水部以下衣部までの本音義所収字、274字について、観智院本との比較を行なった。その結果、観智院本に和音注が見られながら、本音義には見られないものが、33字存した。その33字の、観智院本の和音注と、図書寮本の「真云」の記事とを次に掲げる。

〔観智院本〕		〔図書寮本〕	
漢	禾平 (法上6)	×	(29)
注	禾シ・ユ・チ・ユ・ (34)	〈公公云趣〉	(9)
濟	禾サ・イ (5)	真云細・	(9)
温	禾ウン (15)	真云ウン・	(24)
灌	禾又去 (22)	真云貫・上	(9)
染	禾平 (10)	×	(14)
潮	禾同 (24)	×	(42)

墜	陵	防	降	阜	峯	訖	誕	論	涅	滋	涌	沈	汚	澤	泥	潮	
禾ツイ	禾去！	禾去平	禾我ウ	禾平	禾又去	禾キ乞	禾又平	禾ロ・ン	禾ネチ	禾又去	禾又平	禾チ・ム <small>(マヤム)</small>	禾一禾	禾同	禾又 <small>(マヤ)</small> ナク	禾同	
(42)	(41)	(46)	(40)	(法中 37)	(109)	(52)	(53)	(68)	(カ)	(15)	(39)	(8)	(2)	(41)	(38)	(24)	
×	×	真云ハ・ウ ^レ	×	禾平行内	×	×	真云！	×	×	真云・シ	真云ユ・ウ ^レ		真云チム	真云ワ・ヲ	真云タク	×	×
(232)	(211)	(207)	(197)	(186)	(136)	(95)	(94)	(71)	(25)	(48)	(46)		(21)	(14)	(48)	(40)	(42)

慙	禾或去	(82)	真云(オ・シ)・コ・ン	(256)
憐	禾又リ・シ	(93)	真云リ・シ・レン	(255)
恹	禾リム	(74)	×	(254)
憚	禾又平	(77)	真云タ・シ	(//)
惶	禾或平	(94)	×	(263)
幡	禾ハ・シ	(103)	×	(282)
綱	禾マウ	(121)	×	(297)
續	禾賓	(119)	真云賓	(312)
粉	禾フ・シ	(117)	真云フ・シ	(//)

右に見られる通り、本音義に見られない和音注の中には、図書寮本に既に存していたものが、半数程度有り、本音義の依った改編本の類聚名義抄にも、その和音注は、存していたものと考えられる。⁽¹⁹⁾ そのうちの、或ものは採り、或ものは削除したと考えるのが穩当の様である。⁽²⁰⁾

正音注についても、和音注と同様のことが言える。即ち、図書寮本と比較可能な部分で検討すると、本音義は、原撰本に存していたものをも、削除していることが知られるのである。その際に、どの様な音注を削除したのが問題となるが、この点についての詳しい調査には至っていない。⁽²¹⁾

この類聚名義抄との比較を通して、本音義には、全体として義注が少ないことが知られる。比較の対象となった100字のうち、類聚名義抄に義注が見られるのは、16字であり、その内、本音義に義注が存するのは、「29保・55運・59迦・68〔・99婆・100娑〕」の6字である。得られる用例が少ない為、さらに、舌部・口部・鼻部・見部・日部・田部（以上、観智院本・高山寺本・蓮成院本に見られる。）、水部・言部（以上、観智院本・蓮成院本に見られる。）、の、本音義掲出字の総てである14字について、同様の比較を行なうと、改編本類聚名義抄で義注を有する33字の内、本音義にも義注が見られるのは、僅かに8字である。現存改編本の状況を見るに、これ程義注の少ない改編本の一本が存したとは考え難い。

水部・言部については、図書寮本との比較が可能である。そこで、右の33字の内、水部・言部の30字について、その義注が、図書寮本に存するか否かを見るに、図書寮本にも同様の義注が存するのは、「泥・譯・泣・調・詣・論・誦・詰・謨・託・討・諍・謬・議・諾・讒・讒・讒」の17字、図書寮本には、同様の義注が存しないのは、「溺・滴・謎・注・泛・渚・油・言・證・証・謙・護」の12字であり、残る一字「沝」は、図書寮本に掲出字自体存しない。一方、本音義に義注が存するのは、図書寮本にも同様な義注が存する字の内の「泥・譯」と、図書寮本には、同様の義注が存しない字の内の「溺・滴・謎」とであり、図書寮本に存するか否かには無関係の様である。また、改編本のみ存する義注も採っていることより、本音義の依った名義抄は、義注についても、やはり現存の改編本に近いものであり、その中のある種の義注を、仲甚が削除したものであらうと考えられてくる。

その削除された義注が、表VI中に、⊕として表われた訳である。一々の例を見ると、「14伎」の「藝、」の如く、漢字一字の注であることに気づかれる。これは、右に追加調査した14字中の本音義に不採用の義注についても同様である。これに対して、本音義に採用された義注は、「59迦」の「不得進」、「68〔〕」の「受物之器」、「100娑」の「舞客」、「晡」の「申時」、「沝」の「水不利」、「溺」の「水流」、「滴」の「河懸名」の如く、一字対一字の言い換えではなく、二字以上によって字義の説明をしているものが多い。ただし、「99婆」の「舞、」、「唳」の「嘆、」を、本音義は採っており、

「29保」の「キル衣」、「55運」の「トフ鳥」の二例も採用しているのであり、絶対の規則とは言えない。

(4) 字体注

字体注については、印刷の都合上、これまでと同様の表は掲げないが、類聚名義抄に比して、極めて少ない。また、義注と同じく、本音義に見られながら、類聚名義抄には存しないといった字体注は、無い。

今、比較の対象となった100字の内、名義抄に字体注が見られるのは、25字⁽²⁵⁾であり、その中で、本音義に字体注が存するのは、僅かに、「6仙」「7侵」「14伎」「20僕」の4字である。しかも、4字ともに、名義抄の字体注よりは、簡単な注となっている。

現存の改編本を見る限りでは、改編本の一本に、本音義の如くに、字体注を極めて僅かしか有しないものが存した可能性は、低いと思われる。よって、恐らくは、仲甚が「披類聚名義之書籍注取勝王經之音訓」の際に、不必要と考え、採らなかつたものと思われる。本音義は、「最勝王經」に出現する漢字に対して、「音訓」を注するという意図のもとに作製されたのであり、「音訓」以外の注文は、さほど、重視されなかつたのであろうと考えられる。また、本音義は、「最勝王經」に出現する漢字を順次抜き出したものであり、仲甚の見た「最勝王經」に見られる字体のみ記せば事足りた、といった事情も考えられるかも知れない⁽²⁴⁾。

五、和訓のアクセントについて

本音義の和訓のアクセントについて、西崎氏は、「名義抄の体系、すなわち院政期の体系に近いものとみて大過あるまい」としながらも、「名義抄」と「四割強の不一致の語例が、存する」との指摘をされた⁽²⁵⁾。しかし、これは、「観智院本、類聚名義抄」一本のみとの比較であり、「不一致の語例」の中には、「観智院本」に異なる差声が見られるものばかりで無く、「観智院本」には声点が加点されていない例も、含まれている。また、「観智院本」の同一掲出字の下に挙げられ

た和訓に限つての調査であり、「観智院本」の別の掲出字の下に、同一訓が本音義と同一アクセントで掲げられていても、当該字での例に声点加が見られない場合は、「不一致」としている。さらにまた、アクセントを問題としていないにも拘らず、同一アクセントを示しながら、声点が、単点と双点とで異なる場合も、アクセントが「不一致の語例」としている、等問題が多い。本音義が、現存の「観智院本」そのものに依っているのでは無いことは、既に明らかであり、西崎氏の言う「不一致」が見られるのは、当然であると思われる。

西崎氏が「不一致」としたものの内、「観智院本」に声点加が見られない語に差声された声点は、院政・鎌倉時代のアクセント資料によつて、⁽²⁶⁾当時の当該語のアクセントを示していることを確認できる。結局、本音義に「観智院本」と異なるアクセントを示す声点が加点されている例は、僅かに34例となる。この34例を分類して掲げると、以下の通りである。

(1) 平声軽音節の上声化による相違

「ア・フ」(虻15オ)

観智院本は、「平平濁」であるが、「承暦本金光明最勝王経音義」では、「平平軽」の加点がなされている。観智院本は、この平声軽点を平声に写したものであり、本音義は、鎌倉時代に入つてほぼ完了する「平声軽音節の上声化」を受けたアクセントを、伝えるものと思われる。「蓮成院本類聚名義抄」にも、「平上濁」の加点が見られる。

類例：「コ・ヒ・シ」(慕10オ)・「イ・ヌ」(寝16ウ)・「ヤ」(箭20オ)・「ス・シ」(酸20オ)・「ス」(將24オ)

(2) 去声音節の上声化による相違

「キ・サ・ヤ」(麻18オ)

観智院本では「去上濁○」であり、本音義の差声は、鎌倉時代に入つて完了する「去声音節の上声化」を反映

するものと解される。

(3) 観智院本で上声の部分で、本音義が去声とする為の相違

「タ・ト・シ」(掉5オ・薰10オ)・「ク・タ・ク」(抹5オ)・「ハ・タシ」(踐6ウ)・「マ・カ・フ」(續11オ)・「カ・クル」(勃21オ)

右の5語6例に対する去声点加例は、今回参照した院政鎌倉時代のアクセント資料には、全く見られない。右の去声点加部分分は、いずれも、院政期から上声であったものか、或いは、平声軽が上声化したものと認められる。よって、本音義の去声点加、上声化する以前の古いアクセントを伝えるとは、考え難い。ここで、この5語6例は、いずれも、観智院本の「平上」の部分で「平去」としていることに気づかれる。「平上」と「平去」とは、二音節を単位として見た時には、どちらも上昇調である点で共通する。或いは、このことが関係しているのかも知れない。他資料に類例を求め、尚検討したい。

(4) 観智院本の誤写による相違

「ツヒ・タリ」(弊25ウ)

観智院本は、「平上濁○○」であるが、「胤」の箇所では、「上平○○」(仏下末15)である。また、終止形「ツブ」は、観智院本で、「上平濁」である(「磔」「剋」)。「四座講式の研究」に依れば、終止形が二拍の上二段動詞は、連用形と終止形は、同一アクセントであるので、「ツビ」もまた、本音義の如く「上平濁」となるはずであり、観智院本の「弊」の箇所「平上濁」とするのは、誤写であろうと思われる。

類例…「ヨ・ハフ」(喚5ウ)・「ムス」(咽6オ)・「ク・ツ」(爛7ウ)・「コフ」(縛10ウ)・「ヒ」(火7オ)・「ク・マ」(阿13オ)・「ヨ・ル」(冥16オ)・「モ・ト」(底18ウ)

(5) 本音義の誤写による相違

「タ・ム・キ」(臂25ウ)

観智院本は「平平上〇」。本音義の十八丁表にも「臂」字は見られ、「タ・ム・キ」に対して「平平上平濁」と差声されている為、二十五丁裏の「平平平平濁」は、誤写であろう。

類例：「ウ・ミ・ヌ」(梅4オ)・「コ・シ」(濃9オ)・「ワカ・ヌ」(宛16ウ)・「ホフ・ル」(屠21ウ)・「カフ・ル」(蓋24オ)
 (6)その他

①二通りのアクセントが存した可能性の有るもの

「ス・サ・フ」(荒10ウ)

観智院本、前田家本色葉字類抄は、共に「上上平濁」であるが、『古今和歌集声点本の研究』に依れば、下二段活用の「スサム」が「平平上」のアクセントとなる本が存する(梅・訓・清聞・清声)。本音義は、このアクセントを付したものであるうか。

類例：「オ・ヒ・ク」(舟22ウ)・「カ・ク・ル」(ハ・ラ・フ) (誓24ウ)

②用例不足で判断しかねるもの

観智院本は「平平平濁」、「蓮成院本類聚名義抄」は「平平上濁」。

「ミ・サ・カリ・ニ」(方21ウ)

観智院本「上平平〇」、御巫本日本書紀私記では「上上上上」(30オ)。

以上、34例である。右の内、(3)の相違は注目される。しかし、本音義の基となった観智院本系の類聚名義抄のアクセントを、大部分伝えることは確かであると言える。また、(1)(2)では、どちらも、本音義の方が、アクセント変化後のアクセントを示しており、現存観智院本の親本よりも新しい本を基に、本音義の書写が行なわれた事を、知ることができよう。

六、むすび

以上、本音義の基本的な性格について述べて来た。各節でまとめることは行なわなかったが、ここで簡単に記すならば、次の如くなるう。

一、本音義は、「金光明最勝王經」中の、注を要すると思われる漢字を、部首別分類を施して出現順に並べ、改編本類聚名義抄の一本に依つて、注した書である。

二、その際、使用された類聚名義抄は、現存の西念寺本・観智院本に近い本であり、一般に観智院本系と呼ばれる一本であった。

三、引用は、依り所とした類聚名義抄に忠実であるが、一部、注を削除したと思われる箇所が指摘できる。

四、また、音注の内、「エ〈片仮名〉」「ハ〈片仮名〉」「六」の型の注は、後の増補と考えられる。

五、和訓の中にも、現存改編本に見られないものが存するが、その出自については、現在のところ明らかでない。

六、和訓に付された声点は、類聚名義抄と同じく、院政・鎌倉時代の国語アクセントを反映している。しかし、名義抄で「平上」のものを、「平去」と写すことには、後の要素が関係している可能性が有る。

以上、本音義は、基となった観智院本系類聚名義抄の一本の姿を、大部分残すものであった。また、現存類聚名義抄中、唯一の完本である観智院本だけにしか見られない部首をも伝えており、類聚名義抄の研究上、価値有るものであろう。

本稿で明らかにした点を踏まえ、国語史研究上、今後更に、活用されるべき資料であると思われるのである。

注

(1) 川瀬一馬博士『古辞書の研究』(昭和二十九年四月。講談社。)五三七頁〜五四一頁。

(2) 「天理図書館本」「最勝王經音義」掲出字索引(「訓点語と訓点資料」第六十六輯)。「天理図書館蔵最勝王經音義和訓のアクセント」(「同上」第七十三輯)。

(3) 注(1)文献。

(4) 注(2)後者文献。

(5) 注(3)に同じ。

(6) 注(4)に同じ。

(7) 観智院本・高山寺本は天理図書館蔵本(「天理図書館善本叢書」に依る)、蓮成院本は、鎮国守国神社蔵本(「鎮国守国三寶類聚名義抄」勉誠社。昭和六十一年一月。に依る)、西念寺本は、天理図書館蔵の「類聚名義抄慧榮本」(813頁)に、それぞれ依ることとする。

(8) 『金光明最勝王經』本文は、この場合我が国の古写本が望ましいと考え、西大寺本(春日政治博士「西大金光明最勝王經古點の國語学的研究」に依る)を用いた。

(9) 「ト」部では、「ト」を、「疋」部では、「疋」を、初めに掲げるのであり、最勝王經本文とは関係しない。

(10) 表中、初出例の所在でないものは、人部では、「22傍」「23伐」「26像」「27法」「28倅」「33僧」、言部では、「7詣」「21諍」「24訟」「27議」「28護」「30諾」である。これらの字は、初出例を見逃したか、始めは、注を要しないと判断したが、後に注することとした、等の事情が考えられよう。

(11) 走部・麦部・一部・十部は、本音義に立てられていない為、比較の対象とはならない。

(12) 明らかな誤写は、これを訂正し、仮名遣い、または、音韻変化による表記の差のみものは、これを別語とは認めなかった。
 (13) 蓮成院本と西念寺本には、掲出字相当部分が欠けている箇所が存し、正確な比較とはなっていない。しかし、改編本四本共に存する47字に限って比較を行なってみても、次表の如くであり、観智院本・西念寺本に近いという結果は、変わらない。

	△	○	
	6	19	観智院本
	11	16	高山寺本
	12	15	蓮成院本
	5	21	西念寺本

- (14) ④の和訓に、ある傾向性が認められるならば、このような考えも成立するであろうが、現在のところは、それを見出ししていない。とりあえず、『新撰字鏡』の和訓との比較を行なってみたが、『新撰字鏡』によって新たに加えられた和訓とは言えない。
- (15) 現存改編本のいずれにも存しない訓が、仲甚の見た類聚名義抄には存したと考えるのには、無理が有るように思われる。また、本首義のみに見られる和訓は、必ずしも、和訓注の終わりに加えられているという形になっておらず、後の増補と見るのにも問題が残ろう。

- (16) ただし、「邊」は、『安田八幡宮威大般若波羅蜜多經』にも、邊シユン（巻第百三十）と見られる（東辻保和氏「安田八幡宮威大般若波羅蜜多經の音注（資料）」△「訓点語と訓点資料」第四十四輯）に依る）。

- (17) 本資料中の掲出字の内、和音注を有する字は47字。その47字中、「匱」と同様に、観智院本類聚名義抄には和音注が存しないものが、匱を含め、15字見られる。その15字を次に挙げるが（和音注以外は省略）、いずれも後の書込みとは、考え難い。

心禾真（3ウ） 博禾ハク（4オ） 沃禾^(マ)上^(マ)里（9オ） 津禾シム（9オ） 濃禾ノウウ（9オ） 縦禾従（11オ） 匱禾クキ（12ウ） 福禾フク（14ウ） 療禾レウ（18ウ） 闕禾化チ（19オ） 闕禾トウ（19ウ） 貝禾ハイ（19ウ） 愛禾アイ（24オ） 后禾コウ（24ウ） 穉禾ノク（25ウ）

尚、「沃」に対する「禾上里」は、観智院本・蓮成院本には、当該部分に「又悪上」と見られ、その誤写の可能性が有り、「濃」には、観智院本に「上釀^{本マ、ノウウ}地ヨウ」と見られる。また、「津」は、図書寮本には「禾シム」と有り、「愛」の「禾アイ」も、蓮成院本には見られる、等、本首義の基となった本に、既に和音注が記されていたと考えられる点が指摘できる。

- (18) 沼本克明博士『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』（武蔵野書院、昭和五十七年三月）第一部第二章。

- (19) 蓮成院本も、残存する部分については、観智院本と同様の和音注を有しているからである。

- (20) この100字について、原撰本との直接の比較は、不可能であるが、④の和音注の中には、二形併存のもの（「5健」の「禾見又去コン」、「29保」の「禾ホ ホウ」）や、類音字表記のもの（「13捲」の「禾巻」）が存し、これらは、原撰本に既に存した可能性が高いことが、注（18）文献に指摘されており、それに従えば、④の和音注の、総てを、改編の時点での増補と考えることはできそうにない。

- (21) 『金光明最勝王經』の読誦音に合わないものを削った、等の可能性が考えられようか。

- (22) ただし、「油」には「相花」(観智院本)、「桐花」(蓮成院本)の義注が見られながら、本音義は採らず、例外となる。
- (23) 「2佛・6仙・7侵・14伎・15偽・18停・20僕・28倭・39徹・40修・45衛・50速・56逢・57適・59迦・62邀・70匹・72匱・76就・78聴・79聡・83嬾・85嫉・90娛・94媼」の25字である。
- (24) 本音義に4字ではあるが、字体注が見られる理由は、不明とせざるを得ないが、いずれも、最初の部首である「人部」の始めの部分の掲出字であることが関係しているのかも知れない。また、「仙」の注は、「僊又作」といった、比較的大きく形の異なる異体字を記したものであり、「伎」に対する「女樂作妓」には、本音義の首注のほとんどに付されている合点が、加点されておき、或いは音注と間違えた可能性が考えられるかも知れず、「僕」への「僕俗」の注は、後の書き込みと判断される。
- (25) 注(2) 後者文献。
- (26) 『承暦三年抄本金光明最勝王經音義』『図書寮本類聚名義抄』「改編本類聚名義抄諸本」「和名類聚抄声点本諸本」(馬淵和夫博士編『和名類聚抄^{古写本}声点本本文および索引』に依る)『前田家本色葉写類抄』『法華經單字』『四座講式』(金田一春彦博士『四座講式の研究』に依る)『古今和歌集声点本』(秋永一枝氏『古今和歌集声点本の研究』に依る)『永治二年本古今和歌集』『浄辨本拾遺和歌集』(築島裕博士『浄辨本拾遺和歌集所載のアクセントに就いて』)『國語アクセント論叢』所収』に依る)『御巫本日本書記私記』。以上である。
- 〔付記〕本稿の骨子は、昭和六十二年度鎌倉時代語研究集會に於いて発表したものである。本稿を成すに当って、小林芳規先生より終始御指導を賜り、沼本克明博士には、有益な御示唆を頂いた。また、原本閲覧について、天理大学附属天理図書館の皆様より、格別の御厚情を賜った。記して、謹んで深謝申し上げる次第である。